山旅【ひとり画っ展】一一六九号
『日本百名山の伝説と神話』（六九）

瑞牆山のはなし

「謎の文字と増富温泉の伝説」

奥秩父の岩峰の山、瑞牆山（みずがきやま）は、奥秩父の西部・山梨県北杜市にあって、全山奇岩怪石といわれる岩が、よりあつまっているといっていいほどの岩山です。岩峰群の一つひとつに名前がついていて、鋸岩とか大ヤスリ岩、小ヤスリ岩、小面岩、また洞ノ岩、十一面岩などの名が

あります。

「みずがき」の字に「瑞牆」の字を使い始めたのは明治時代、当時山梨県知事だった武田千代三郎という人だったそうです。「みずがき」とは、神域を囲む垣根という意味だそうです。つまり神社のまわりの垣根のようなものでしょうか。

そもそも「ミズガキ」の文字は、江戸時代の甲斐の国の「地誌」にも登場しています。その地誌『甲斐国志』（かいこくし）の金峰山の項（巻之二十、山川部第一）に、

「一金峰山――――臆乗ニ曰ク、古図ニ金峰ヲ玉塁トス、多麻賀畿（タマガキ）ト訓ズベシ、今小尾（おび）村・比志（ひし）村等ノ里人、此ノ山麓ヲ指シテ瑞塁（みずがき）ト呼ブ、蓋シ古名ノ偶に存シタルナラント」と

あります。

つまり、「古い地図には金峰山の山名を、玉墨と書いて「タマガキ」と読ませていた。それに対してふもとの小尾（おび）村や、比志（ひし）村の人たちは、この山のふもとを瑞墨（みずがき）と呼んでいた」。この「瑞墨」が「瑞牆」の文字になったというのです。

これでは、金峰山は「タマガキ」という山名で、そのふもとは「ミズガキ」といい、そのミズガキがいまの瑞牆山になったことになります。しかし金峰山と瑞牆山は同じ山ではありません。瑞牆山と金峰山は、全然別の独立峰であり、ちょっとこの見方は無理でないかとの説もあります。

山名については、さらに別の説があります。この付近では、山稜が三つに分かれる所を「三繋（つな）ぎ」といっていたそうです。その「みつなぎ」が神への敬いから、みやびな呼び方で瑞牆（みずがき）になったのでは、との説もあります。さらにさらにこの山が崖だらけであり地形の特徴

から、みずがきの「がき」は崖のことだという意見もあるようです。

山頂は東西、ふたつの峰に分かれていて、東峰に三角点と祠があり、西峰は弘法岩と呼ばれています。頂上からは、南東には金峰山、南には御坂山塊、その上に富士山、南西に目を移せば南アルプス、中央アルプス、北アルプスと絶景の展望です。

また初夏のころにはアズマシャクナゲ、ミツバツツジの大群落が咲き乱れています。

▼【古代文字伝説】

ところで瑞牆山の南側南側には、西に流れるアマドリ沢があります。その上流の岩壁には、弘法大師のものだとする文字と、古代文字だとする二つの文字が彫ってあるそうです。大正から昭和初期の登山家の大島亮吉が、雑誌『山岳』に寄せた一文「瑞牆山・小倉山」に次のようなことが書いてあります。ちょっと長いですが、ご勘弁ください。

「――瑞牆山名所として弘法大師文字および古代文字なるものあり。ともにアマドリ沢の上流に在りて、大いなる岩壁に刻せる文字なり。古くより「ヤマシ」（山師？）の間に知られたるものなりと言うも、近時山麓増富村青年団の道を開き、道標を打ちてその名所の喧伝に努めおれり。同文字は二ヶ所にありて弘法大師が遊びに来て刻めりと伝うるものは、アマド

リザワ左岸の金峰山図幅にはなき小岩峰に二字二行に刻まれたものなりと言うも、小生は訪ねんとして道を発見し得ざりしため訪わず。――

――ただ古代文字と称せらるるものを訪いたり。同地点は金峰山図幅瑞牆山頂二二三〇・二米より正西に五峰の岩峰連続せる内最西より第二番目の岩峰の西側の壮大なる岩壁面にあるものにて同地点まで微かなる道あり。文字は約一丈程の長さにて、平均二尺四方程の大きさの文字五六字を花崗岩に刻めり。風化してほとんど字形を止めず。最初はこれは人工のものに非ずと思いたるも余りに不自然に字形をなし居ると、同附近岩面にこれに似たる皺襞（しゅうへき）を全然認めず、――

――且、同岩壁の上方殆ど垂直にして十数丈程高き岩壁に縦に細長き長

正方形の岩窟らしきものありて、同地点までの岩登りは余程困難なれども、かつて岩茸採りが好奇心に駆られて登りみたるに同岩窟内に剣一振り奉納しありたりと聞きたるをもってこれと考えあわせて、古く修験者の同岩窟に修行して、その際にても刻みたるには非ずやと判断して、同古代文字のやはり人工のものならんと小生も信じたる次第なり。---

---しかれど到底大なる足場にても造り為さざる時は人工にては不可能なる個所に刻まれあるをもって、よく一人の修験者にして如何に時間と労力とを厭わざる者なりといえども仲々になし遂げ難きを思いて未だ完全に疑念晴れず、同文字より岩窟までの岩壁はほとんど垂直にして五六丈の高さなり。文字の凹みを登れば足場と手懸かりは相当あれど、小生はロープなくしては下降不可能と思いて躊躇したり。右方に垂直のチムニイあり。

---それより登ることを得んも一ヶ所下方より望みて悪場あり。同文字

は垂直にして滑らかなるチムニイ左方の岩面にありて、岩窟に到る唯一の絶好の足場と手懸かりをなし居れり。察するに上方の岩窟に到りて修行せんと来たれる謀修験舎の文字を刻みて足場と手懸かりを造りつつ、該岩窟に攀じるたるものには非ずやととも考えたり。――」とあります（『日本山岳風土記三』所収）。長々とスミマセン。

▼【弘法大師梵字伝説】

弘法大師の文字といわれるものは、やはりアマドリ沢上流の洞ヶ岩の洞くつにあるといいます。その洞窟の奥に梵字（ぼんじ）らしく彫られた凹凸があり、それは「カマンポロン」と読めるといいます。意味は「大日如来不動明王」で、これが弘法大師が彫ったものだそうです。同じ洞窟の中には行者が修行をした跡もあるといいます。

ちなみに梵字とは、梵語を書くのに使う文字で、弘法大師空海や伝教大師最澄が日本に伝えた密教と密接な結びつきがあるそうです。そういえば

平安初期、空海が霊場を求めてこの山に来たとの伝説もあります。

▼【空海霊場伝説】

平安時代弘法大師空海が、和歌山県の高野山のような霊場をもとめて、全国をめぐっていましたが、ここ瑞牆山にもやってきて霊場としてふさわしい場所として、修行していました。しかし、このあたりには霊場をつくるのに必要な「八百八谷」がないことが分かり、あきらめたと伝えます。

その後、大師は条件に合う場所を探しながら、はるばる和歌山県まで行き、やっと高野山をみつけたという。文字はほんとうに平安時代のものでしょうか。それにしてもまかり間違えば、ここが「高野山」だったかも知れなかったわけではあります。

▼【神の湯伝説】

瑞牆山のふもとには増富温泉があり、下山後ゆったりと湯船につかり、

疲れを癒す登山者も多く見かけます。ここにはこんな伝説があります。増冨温泉は、昔はお湯が一ヶ所から湧きだしていて、村人は神の湯として崇め、神聖な場所として不浄なことをいさめていました。

ところがある時、若い猟師たちが山からイノシシを獲ってきて、皮を剥ぎはじめました。そして血まみれの刃物や汚れた手、足をこの神聖な湯で洗っていました。すると神の湯をけがしたことに怒った神が、白髯（ひげ）の仙人になってあらわれ、両手でその湯をすくい、西北に飛び去ってしまいました。

それからというもの神の湯のわき出す量が減り、その温度も下がってしまったといいます。その後、仙人がお湯をすくって運ぶときに、両手のすき間からお湯がしたたり落ちたところに、新しい温泉が湧きだしたというのです。いま、五〇数ヶ所もの湧出地があるのはその時のものだそうです。

また、瑞牆山登山口里見平から、増富方面へ少し南下した金山集落は、

昔、武田信玄の金山採掘の場所。その人夫数千人を送り込ませたため大にぎわい、「金山千軒」といわれるほど人家が繁昌したそうです。金山は廃坑になっていますが、金鉱を砕いた石臼がいまも残っているそうです。

▼瑞牆山【データ】

★【所在地】

・山梨県北杜市須玉町（旧北巨摩郡須玉町）。中央本線韮崎駅の北東二四キロ。中央本線韮崎駅からバスで増富温泉、歩いて五時間三〇分で瑞牆山。三等三角点（停止【亡失】）と写真測量による標高点（二二三〇ｍ）がある。地形図に山名瑞牆（みずがき）山と標高点の標高の記載あり。

★【位置】

・標高点：北緯三五度五三分三六・四五秒、東経一三八度三五分三一・五

五秒（国土地理院「電子国土ポータルWebシステム」から検索）

★【地図】

・二万五千分の一地形図「瑞牆山（甲府）」

▼【参考文献】

・『奥秩父・大菩薩連嶺』（アルパインガイド三五）羽賀正太郎。（山と溪谷）一九七九年（昭和五四）

・『甲斐国志』松平定能（まさ）編集。一八一四（文化一一年）：大日本地誌大系四五『甲斐国志』（第二巻）佐藤八郎ほか校訂（雄山閣）一九八二年（昭和五七）

・『甲州の伝説』（日本の伝説一〇）土橋里木・土橋治重（角川書店）一九七六年（昭和五一）

・『角川日本地名大辞典・山梨県』（角川書店）一九九一年（平成三）
・『新日本山岳誌』日本山岳会（ナカニシヤ出版）二〇〇五年（平成一七）
・『日本山岳風土記三』田部重治、辻村太郎監修（宝文館）一九六〇（昭三五）
・『日本山岳ルーツ大辞典』村石利夫（竹書房）一九九七年（平成九）
・『日本三百名山』毎日新聞社編（毎日新聞社）一九九七年（平成九）
・『日本山名事典』徳久球雄ほか（三省堂）二〇〇四年（平成一六）
・『日本歴史地名大系一九・山梨県の地名』（平凡社）一九九五年（平成七）
・『山の憶い出』小暮理太郎：「日本山岳名著全集二」（あかね書房）一九六二年（昭和三七）
・『梵字手帖』徳山暉純（きじゅん）（木耳社・もくじしゃ）一九八四年（昭和五九）

【お知らせ】

★アマゾン入本・作者コーナー

https://www.amazon.co.jp/stores/author/B004L1SDTE

★My books出品

https://toki.moo.jp/baiten/baiten.html

★グッズ・SUZURI社

https://suzuri.jp/toki-suzuri/products